

外まで聞こえた。静かな、冬の家並みに響き渡っていた。長い間二人だけだった。近所も人の気配はなかった。その鉄瓶も好奇心旺盛な幼児の心を永遠に捕らえていることは出来なかった。幼い弟はついに外が真つ暗なのに気付き、母親がいまだに家に帰って来ていない事に気付き、兄に母親がどこにいるのかと尋ねた。兄はそれを知るよしもなかった。二人は手をとめ、家を見回した。自分のまわりの世界が暗く、もの音ない静けさに包まれているのに気が付いた。その静けさがたまらなく悲しくなり、弟は泣き出した。兄は困った。どうするすべもなく、家の窓から外を見た。

この情景がよく僕の頭に浮かぶ。

よく考えると、それは、昭和三十年二月十二日の夕方、僕が六つで、弟の京太は四つの時の記憶に近い状況である。

あの夜、七条通りの西の洞院の病院で、父が死んだ。

電気も付けず、僕と弟の京太は家で誰か帰って来ないかと待った。

長いことたって、隣の「おへさん」のおばちゃんに来て、

「こんなとこにいたんか。」

電気消えてたから、

外でまだ遊んでると思てた。」

と言って、僕たち二人をタクシーに乗せて、

病院へつれて行った。

赤いじゅうたんが引かれた大きな病院だった。

スリッパに履きかえて階段をあがって

父のいる病室に行くと、人がいっぱい立っていた。

導かれるまま、京太と僕はベットの前に立ち、のぞき込むと、息をハハハして苦しそうな父の臨終の姿があった。

## 何にもなかった